中學國文教科書

修正四版

巻六

4a
810
明44

41999
教科書文庫
4
810
41-1911
20000
89885

資料室

修正四版
文部省檢定濟
明治四十四年二月二日　中學校國語科教科書

吉田彌平編

中學國文教科書

卷六

東京　光風館藏版

資料室
49
810
明44

中學 國文教科書 卷六

目次

一 讀書眼……幸田露伴 一頁
二 ハンニバルその一……矢野龍溪 四
三 ハンニバルその二……矢野龍溪 九
四 月の洞庭湖（口語文）……佐々木信綱 一四
五 禁庭の野分（皇后陛下御作）…… 二〇
六 植物と氣象（口語文）……三好學 三三
七 空行く鴈その一…… 二九
八 空行く鴈その二…… 三四

M. Ogawa.

九 伊藤公ヲ誄ブ……井上馨 三九
一〇 血氣を戒む(候文)……吉田松陰 四四
一一 佛領に於ける支那人……竹越三叉 四六
一二 相模灘の落日……德富蘆花 五〇
一三 四季の月(今樣歌)……石川依平 五三
一四 乙若その一……五五
一五 乙若その二……六一
一六 近郊の晩秋……正岡子規 六七
一七 常磐樹(新體詩)……島崎藤村 七一
一八 如意輪堂……七六
一九 熊王の發心……八二

二〇 武士のなさけ(口語文)……芳賀矢一 八七
二一 友に寄す(候文)……高山樗牛 九四
二二 門生に諭す……室鳩巢 九八
二三 西航記……巖谷小波 一〇二
二四 俳句評釋……正岡子規 一〇九
二五 平重盛論その一……高山樗牛 一一四
二六 平重盛論その二……高山樗牛 一一九
二七 經筵進講錄……元田永孚 一二三

中學 國文教科書 卷六

幸田露伴

一 讀書眼

梅には梅の香あり、松には松の氣あり、英雄には英雄の氣象あり。織田信長の今川義元と戰ひたる時、*五月十八日、敵軍大高に著したる由を丸根の城より注進し來れるにも拘らず、軍評定にも及ばで、雜談酒宴をのみ事として夜を徹し、其の曉方に又注進ありて、敵、今、鷲津・丸根の城へ取掛けたりといへるを聞くに及び、舞の曲の「人間五十年、下天の中を比ぶれば夢幻の如くなり、一度生を受け、滅せぬ者のあるべきか。」

香英雄
氣象
*正親町天皇永祿三年。
敵軍
注進
曉方
下天
夢幻

繰返
法螺
具足
物具
*總見院織田信長一生の事歴を記せる書。
云々
偶然
平生
愛誦
句
天澤
行儀
清洲
友閑
敦盛
信長公記

といふところを繰返して自ら舞ひ、さらば「法螺吹き立てよ、具足おこせよ。」と命じ、やがて物具して馬を出し、竟に桶狭間の一戰にて義元を打ち取りたるは*總見記などに見えて、誰しも知るところなるが、「人間五十年云々。」の句は、時に當りて、偶然信長の思ひ浮みたるまゝに歌ひ舞ひしには非ず、實に信長の平生愛誦したる句なりしなり。

天澤といへる僧、武田信玄の問に應へて、信長の行儀を語れる中に、信長は清洲の町人友閑といふ者を召して舞をまひ、しかも「敦盛」一番より外は舞はず、「人間五十年、下天の中を比ぶれば夢幻の如くなり。」といふところを口づいて舞ふと云ひたる旨、信長公記に見ゆ。さすれば、信長は「敦盛」の中の此

數句感悟
熊谷直實
無常
道心
厭離穢土
欣求淨土
死生
大丈夫
做す
諷誦
本意
所謂
天人
餓鬼

の數句を聞きて、深く密に感悟するところあつて、平生好んで歌ひ舞ひしに疑無し。

「人間五十年云々。」の句は、熊谷直實の敦盛を打ち取りて後、無常を感じて道心を發する條に見えたる句なれば、曲の方よりいへば、厭離穢土・欣求淨土の意を述べたるなれど、信長は、「人間五十年實に夢幻の如し。生あるものは必ず死す。死生また何ぞ謂ふに足らんや。大丈夫たゞ當に其の爲さんと欲するところをなすべきのみ。」といふやうに取り做して、好みて諷誦したりと覺し。されば、信長の取りかたは、曲の本意には聊か異なりと雖も、所謂「同じ水を、人間と魚と天人と餓鬼とにて樣々に見る。」といふ喩の如く、信長は信長の耳

骨髓、徹す。
噂、人間。
機變、
滅す。
欺く。
購く、好。
不好。
露る。

にて聞きて、信長の心にて味ひ、さて己が骨髓に徹するところあるを覺えて、人も知りて噂するまでに、「人間五十年」の其の句を愛したりしなるべし。信長は機變甚だしき人なれども、平生好んで、「一度生を受け、滅せぬものゝあるべきか」といふところを舞ひつ歌ひつしたるは、決して人を欺き世を購けるにはあらじ。かりそめの好・不好の中にも英雄は自ら英雄の氣象露るといふべし。（潮待ち草）

二　ハンニバルその一

矢野龍溪

英雄の成敗は千古傷心のこと少からずと雖も、東西古今を通じてハンニバル*の事の如く悲しきはあらざるなり。幼

幼齡、卓前。
雠言、畢生。
國雠言、拉言。
終焉一念。
帥ひ。
侵入、兵閒。
人生家室。
家族團欒。
*亞細亞諸邦。
竊追朝廷。
流寓、斃る。
尋常。
用兵、優。

齡九歲の彼が其の父に伴はれて神の卓前に立ち、國雠なるローマを畢生の敵とすべきを誓はしめられたるより其の終焉に至るまで、一念常に國雠を報ずるに非ざるものなし。彼は二十七歲、人生の花とも稱すべき時、大兵を帥ゐて敵國に侵入せしより以來十六年、苦を兵閒に積み、曾て人生室家の樂みを享けたる跡なし。大功成るに垂んとして果さず、ローマの爲に竊追せられて諸邦の朝廷に流寓し、終に毒を仰いで斃る。嗚呼人生の慘なる、復此の人の如きを見ざるなり。

若し彼をして尋常人ならしめば、亦深く悲しむに足るものなし。然れども其の用兵の略は優に古今名將の上に出で、

名將 外交 政務 賢 粗暴家 文弱人 人格非議 末路傷心 所以 對峙 兩立 戰鬪 尚武 驅る 狼

外交に敏に、政務に達し、賢に禮し、士に下り、學を好み、民を愛す。彼は武ありて文なき粗暴家にあらず、文ありて武なき文弱人にあらず、人格上一點の非議すべきところなく、而してその末路かくの如し。是、特に人をして傷心に勝へざらしむる所以なり。

地中海を隔てゝ南北に對峙するものはローマ・カルタゴの二共和國なり。天は二國の兩立を許さず。彼滅びずんば此興らず、彼衰へずんば此盛んならず。ロ人は戰鬪を事とする尚武の民なり、カ人は貿易を主とする平和の民なり。カ人をしてロ兵と戰はしむるは羊を驅つて狼に向はしむるが如し。況やハンニバルの事に當りしは既に其の國が

痛擊 乃父遺志 繼ぐ 屬領 募る 強敵

見兵 峻嶺 難路 減ず 北野

一たび痛擊を受けたる後なるをや。本國人の賴むに足らざるを知り、乃父の遺志を繼いで兵を屬領に募り、之を以て強敵に當らんとす、事固より既に非なり。彼豈之を知らざらんや。知つて而して是に出づる、亦實に勢の已むを得ざるものあればなり。

ハンニバル

彼が志を決してイスパニアを發するに臨み、其の兵幾ど十萬と號す。然れども、ピレネーの峻嶺を超え、アルプスの難路を過ぎ了へしとき其の兵已に四分の一に減ず。彼がローマの北野に進みしときは、見兵僅に二萬五千に過ぎざ

途上怨嗟　寛大軍中

死生　折言ふ

蠻族　組成燃ゆ　蕪雜　烏合　恩威　焉ぞ　偉功奏す　將帥

るなり。其の途上於にて兵士の怨嗟を聞くや、彼は寛大にも軍中に令して曰く、「去らんと欲するものは去れ、從ふことを樂しむものは來れ。」と。此の時に當りて將軍を棄てんとするもの數千人なりきと雖も、なほ二萬餘の兵は死生を共にせんことを誓へり。而して其の兵はイスパニア及びゴール北部諸種の蠻族より組成せしもののみ。決して夫の愛國心燃ゆるが如きロ兵の比にあらざるなり。蕪雜烏合の此の兵に對して恩威の大なるものあらざるよりは、焉ぞよく斯の如くなるを得んや。古今偉功を奏せし將帥を見るに、其の兵士は多く統一せる國民にして愛國心あるものにあらざるはなし。唯それハンニバルに至つては卽ち然

通論　勇怯懸絶　強弱

要素　闕ぐ　異樣　將來　印度統一　勇壯絶倫　無雙　壓服

人品　私評　歐洲史家　前三五五―前三三〇。　一七一二―一七六。　一七六九―一八二一。

らず。其の將士は其の將軍に對して單に恩威を感ずるのみ、實に愛國の要素を闕けり。此の異樣の兵を以て夫の將來印度以西を統一すべき運命を荷へる勇壯絶倫、愛國無雙のローマ人に敵對し、一たびは幾ど之を壓服せんとしたるなり。嗚呼此の人の外、千古復此の人あらんや。（戰時畫報）

三　ハンニバルその二

矢野龍溪

獨り人品のみならず、其の戰鬪に長ずること亦古今無雙なり。アレキサンデル・フレデリキ・ナポレオンと雖も其の上に出づるを得ず。是余の私評にあらず、歐洲史家の通論なり。我が兵と敵兵と强弱勇怯既に懸絶せるのみならず、敵

寡兵　奇戰　前三六。謀略　戰術有名　巧妙　死屍潰敗　全勝大敗　緒有　指環　數斛　贈す　驚喜　幾何　憾む　疲憊

は毎に大兵にして我は毎に寡兵なり。然るになほ奇戰には謀略を用ひ、正戰には戰術を用ふ。有名なるカンネの大戰を見よ。彼の兵數は敵軍の半ばにも當らざりしにあらずや。しかも堂々たる正戰に於て彼は巧妙なる戰術を用ひ、敵軍をして七萬の死屍を戰地に遺して潰敗せしめたり。斯の如き全勝大敗は歷史上實に稀有の事なりとす。戰地に斃れたるローマ貴族の指より集めたる金の指環數斛を彼の使が本國に齎し歸りて之を國會に示せるとき、其の國人の驚喜は幾何なりしぞ。此の大勝に乘じて直ちにローマを衝かざりしは後人の憾むる所なりと雖も、其の兵やも と甚だ多からず、加ふるに戰後の疲憊を以てす、此の危道を

危道　越ゆ　城邑　遙か　欵　捨つ　部將　騎兵　晩食　獻策　得失　批議　俟つ　援兵　金穀　蹂躪

行かずとも、一方にてイタリア南部の城邑は皆遙かに欵を送る勢あり、彼を捨て此を取る、亦理なしとせんや。此の戰の夕、一部將が「我に三千の騎兵を與へよ、將軍の爲に直ちにローマを衝き、二日を出でずして將軍をローマの城中に晩食せしめん。」と獻策せし時、彼既に其の得失を知る、必ずしも後人の批議を俟たざるなり。

彼の國人は必要大切の場合にも曾て十分の援兵を彼に送りしことなし、十分の金穀を彼に與へしことなし。是、彼が十六年間敵國を蹂躪しながら遂に其の成功を最後に誤りし大原因なり。實に、本國人民の罪にして彼の罪にあらず。斯の如くにして彼は十六年間自ら兵を他國に募りて其の

闕を補へるのみならず、其の金穀も常に之を敵國に取れり。其の忍耐の大なる亦其の智略と竝行すと謂ふべし。

彼は善く戰へり。彼は巧に外交を操縱せり。然れども其の本國は卻て敵の侵入を防ぎ得ず、勢の救ふべからざるに及んで彼を召喚してこれに當らしむ。嗚呼亦遲し、彼の智勇もこれを如何ともする能はず。しかもなほ此の存亡の秋に在つて、敵と講和の約を結び、國人をして小康を得しめ、一方には財政を釐革し、一方には憲法を修正し、下層人民の愛國心を涵養し、國帑の急を緩め、莫大なる償金を年々支辨し得る途を畫策せり。彼豈尋常の一武弁ならんや。彼をして平時に出でしめば必ずや治平の良宰相たらん。

闕補ス。
忍耐、智略
竝行、
操縱、
侵入、召喚ス。
嗚呼、
存亡、
情勢、小康
釐革、
憲法、修正
下層、涵
養、國帑
償金
支辨、

轉戰、
宰相、
武弁、
畫策、

其の未だ本國に召喚せられずしてローマの野に轉戰するや、兵寡く食竭く。恢復の望は單に懸けて其の實弟ハスドルバルがイスパニアより援軍を率ゐて來り合するにありしなり。然るに天は衰邦に祚せず、彼の弟はイタリアの北野に敗られ、彼が手を握りて久別の喜を敍せんと樂しみたる其の人の首級は敵の槍鋒に貫かれて、遙かに我が營前に現れたり。嗚呼人生悲酸のこと多しと雖も、未だ此の人の此の時の如きはあらざるなり。

彼が遙かに弟の首級を望みけるとき、「我今カルタゴの運命を知れり。」と歎ぜし一言は、如何に無限の悲痛を含みしぞ。尋常骨肉の情よりするもなほ忍ぶ能はず、況や自國の興亡

恢復
衰邦、祚ス。
握る、久別
前二〇七。敍ス。
首級、槍鋒
營前、
悲酸、
興亡、
運命、
歎ず、無限
悲痛、
骨肉、

原頭、盡忠、報國、黥文、露す、餘杭、斬る、

援軍、懸る、掩う、長嘆、捷つ、

諸葛武侯、名は亮、蜀漢の忠臣。

岳武穆王、名は飛、宋の忠臣。

岳武穆、目覩、名將人格、

岳州府城、

は此の援軍の勝敗に懸れるをや。史を讀んでこゝに至り、卷を掩うて長嘆せざる者果して幾人かある。「出師未捷身先死。」の五丈原頭の武侯や、盡忠報國の黥文を露して餘杭の市に斬られたる岳武穆も亦何ぞ比するに足らん。彼の戰略・戰術が人目を眩耀するがために、人或は其の名將たるを知つて其の人格を察せず。若し能くこれを究めば、其の不幸を悲しむ情轉〻深きを加へん。千古傷心の事、實に此の人の一生の如きはあらざるなり。（戰時畫報）

四　月の洞庭湖

佐々木信綱

岳陽樓は岳州府城の城壁の東の隅に立つてゐる三層樓で

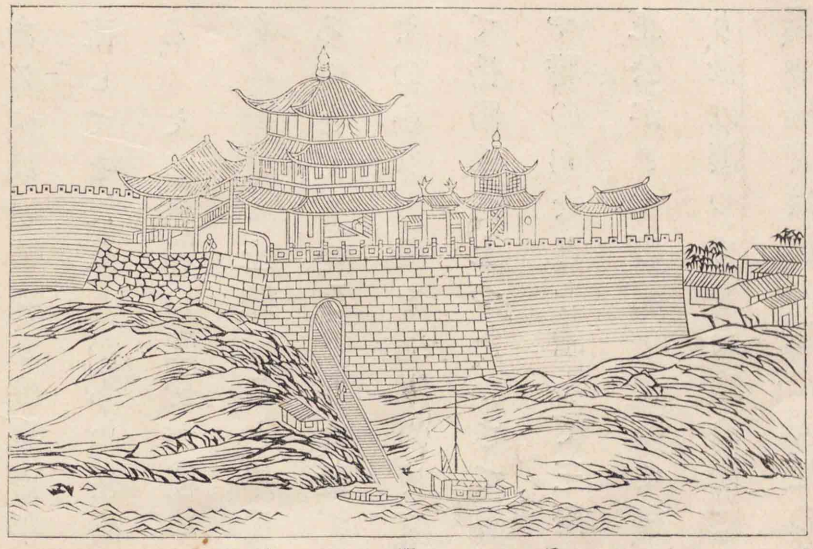
壁城、黑ずむ、燦爛、色彩、

三層樓、甎瓦、屋宇相、金碧、美觀、

※范仲淹の岳陽樓記の中に、「衡、遠山を呑み、長江、浩々湯湯、横無際涯。朝暉夕陰、氣象萬千。此則岳陽樓之大觀也。」

ある。城壁の甎瓦は幾百年の風霜に黑ずんでゐる。建て直してまだ久しからぬ岳陽樓は、金碧燦爛として輝いてゐる。その色彩の配合が極めて美觀である。

船を捨てゝ上陸すると、岸邊の小屋がまた珍しい。「蘆のまろ屋」とでもいひさうな、蘆で蒲鉾形に葺いた低い家である。その小屋の間を通りぬけて、高い石段をあがり、城門をぬけて岳陽樓へ上つた。さて案内の僧に導かれ、壁に題した詩や聯の句などを讀んで三層樓の上にあがつた。かの范文正公がこゝの※記を書いて後、この樓は幾度か重修し、人は變り、世は遷つても、天然の景には變遷がない。唯見る、浩々湯湯、洞庭湖は目の前に天地の大幅をひろげてをる。湖の門



岳陽樓

戸には彼の堯の女湘君が居たといふ君山が右に、扁山が左に、いづれも江の島位の大きさの島で、さながら洞庭宮を守る獅子・狛犬の如くである。其の眞中に今や夕日は落ちようとしてゐる。天地の大觀に見とれて覺えず吾を忘れて居たが、促し立られて船へ歸つた。

幸に風は追手。帆を張つて

*平沙落雁。
遠浦歸帆。
山市晴嵐。
江天暮雪。
洞庭秋月。
瀟湘夜雨。
煙寺晩鐘。
漁村夕陽。

愈〻洞庭湖の中に入らうとする。夕日は二つの島の間に落ちて、見る〳〵紅の眞玉が湖心に沈む。顧みれば岳州府城の上に月は昇る。「洞庭八百里、月照岳陽城」といふ詩の通りである。日を數ふれば十二月三日、恰も舊曆十月十五日の夜瀟湘八景の洞庭秋月ではないが、望月の夜、洞庭を過ぎるとは何といふ好因緣であらう。

夕日は遂に湖心に沈んだ。其の餘光が空に輝くや、空の色は忽ち紅に變じ、其の紅の色は湖上に映じて、畫にも寫しがたい麗しい中を、遙かに一帆、又一帆、風のまに〳〵、遠く、近く、かつ顯れ、かつ消える。其の言ひ知らぬ風景、寧ろかういふ風景の中に包まれながら、湖の底深く沈んだならばと思は

れる位。

美しかつた夕映も光を失つて、湖の上は薄暗くなる。月は愈〻澄み上る。見えるものは唯黄金・白銀の波。「皓月千里、浮光躍金。」といふ有様である。廣い果知らぬ湖の上、進み行く我が船の近くに二三の釣舟が居る。昔、卓彦恭といふ人が洞庭を過ぎた時、月下に釣せる小舟を呼びとめて、「魚ありや、否や。」と問うたに、老人らしい聲で、「魚はないが詩がある。」卓喜んで「願はくは一篇を聞かん。」老人枻を鼓ちて、

○八十滄浪一老翁、蘆花江上水連空。
　世間多少乘除事、良夜月明收釣筒。

と高吟し去つたといふ。さる風流の漁翁のありやなしやは知らぬが、二三の小さな釣舟はたしかに大いなる湖の月夜の景趣を添へるのであつた。

月は良く、風は追手。船は帆腹飽滿、一瞬千里の勢で進む。夜はふける。月は愈〻澄む。此の意人の識るなし、いひしらぬ樂しさ、寂しさ何ともいひ難き感が胸に充ちて、我が身そぞろに我あるを知らず、此の隈なき月と果なき湖とに對して居た。一昨年の初秋、富士に登つて、絶頂に見た七月十七夜の月。かれは山頂、これは湖上。しかし、あはれは同じあはれで、風月の縁に富むことを天に謝したことであつた。

（帝國文學）

○岳陽樓記の句。
○宋の人。傳闕く。

五　禁庭の野分（皇后陛下御作）

朝露のひるまはさしもなかりし空の、暮過ぐる頃よりかきくらし、夕月の光も見えず。とかくするほどに、雨いたく降り出でて、ほとり近く語りあふ人の聲さへ聞きわかぬばかりになりぬ。閨に入りにし頃までは、なほ雨の音のみ聞えしを、夜深くなるまゝに雷さへ鳴りはためきて、手枕の夢現とも思ひ定めぬるひまなく、稻妻のきらめきわたる、いとすさまじ。曉がたには雨はをやみて、風は烈しう吹き出でつつ宮の内もゆるぐばかりなるに、いとゞ目も合はず。上には、畏くも民のためとて遠き境に出でましつるほどなれば、いかなる行宮にまし〳〵て、この風の音に御心を惱ま

したまふらん。皇太后の宮にはいかにおはしますにか。宮たちも驚きやしたまふらん。思ひ續くるほどに、夜も明けたれど、未だ風靜まらで、いづこもおろし籠めたる、いとものむづかし。軒近き栗の枝の、實を結びたるまゝに、吹き折らるゝ音いと烈しう、御階の下の芭蕉も筒井の傍なる柳も皆折れふしぬ。今をさかりと見えし眞萩も名殘なう散り亂れたる、いとさびしう見ゆ。宮の内さへかく荒れぬるを、ましてまばらに瓦おきたる賤が家居などは、たふれたるも多からんなど思ひやるもすゞろにかなし。「おしなべて、みのりよし」と聞きつる千町田の稻も吹きそこなはれつらんやなど思ひつゝ、

國のた乞、科戸乃神も心去て
稻葉ゟ上はを紀て吹かゝん。

なほ心苦しう思ふほどに、いつとなく風靜まりて、雲間の日影まばゆくさし出でたる空の氣色に、おのづから人の心もおちゐて、烈しと聞きし嵐の音も夜半の夢となりぬるなるべし。

六　植物と氣象

三　好學

四季折々の植物は、その季節々々の氣象と關係して一段とその美觀を增すものである。例へば、春は霞が空にたなびいて曇りがちに見えればこそ、山櫻の咲き揃つて雲とも擬ふ有樣が一しほ趣深う思はれるのである。秋の空のやうに空氣が澄んで遠くまで見え透く時節では、櫻の優美な特質が迚も十分には現れまい。又野山が霞に籠められて紫がかつて見える長閑な春の日に、蝶や蜂が野一面に咲いて居る紫雲英・蒲公英の花を訪ひまはる樣なども、景と物とがよく折合ふのでいかにも美しい。

新綠の頃になると、快晴の日でも何となく空氣が水分を含んで、夕立の雲が起りさうに見える。その蒼々と晴れた熱い空には、高い木立や茂つた竹林などが最もよく折合つて、周圍の景色が如何にも夏らしく思はれる。然るに秋の空は前の場合とは違つて、空氣が清らかで遠方まではつきり

と見える。從つて楓樹の紅葉や公孫樹の葉の黄ばんだ樣は、秋の快晴に照して見ると、最も美しい。冬の末から春の初めになると、よく晴れた日中でも兎角寒さが烈しいが、その寒い晴れた日の朝、梅や臘梅などの咲いて居る有樣は、いかにも勇ましく感じられる。

曇の空にも色々あるが、春の花曇はその時候に伴ふ現象で、櫻狩などによく適してゐる。また今にも降り出しさうな空合、卽ち雨意を催して居る空には、柳や杉や樅などの林がことさら面白く見える。

雨にも色々の度がある。燕子花・花菖蒲・溪蓀などの咲く頃には、五月雨が降りつゞいて、一しほその豔美を添へる。又

此等の植物の自然と雨を防ぐやうに出來て居る花瓣や葉に著いて居る水玉が、日光を受けてほんのり明るく見えるのは頗る面白い。雨と燕子花とは昔から聯想したものと見えて、古人の文章や俳句などにものぼつてゐる。

又驟雨・雷雨のやうな烈しい雨と植物との配合も自らあるらしい。例へば、梧桐などの樹に急雨が當ると、ばら〳〵と音がして、その葉の尖つて居る先から露が滴つて、いかにも風情がある。又、樹の膚も、雨に濡れると一層鮮綠色になつてその美を增す。

又、降り續く長雨には竹がよい。竹に雨が當ると一種の音を發するから、雨聲を聞くには最も妙である。殊に孟宗・苦

竹などの大竹藪に雨がかゝる有樣は、實に趣味が深い。元來竹は雨の多い熱帶地方の植物であつて、雨に濡れると、枝や葉が下へ向いて、細長い葉の先から雨垂が流れ落ちるやうに出來て居る。又、竹は材質が強靭で、幹の組立も特別になつてゐるから、枝が雨に濡れて、重みが加つて、俯いて來ても、折れるやうなことはない。竹の此の性質も、雨との配合上注意すべきことであらうと思はれる。

秋雨について聯想の起る植物も少なくない。例へば芭蕉などは秋の末の雨風にさらされて葉が破れ、筋がばら〳〵に離れて、憐れな姿になる。又蓮の葉も雨を受けるに適して居て、表面は少しも水に濡れぬ。これは葉の表一面に天鵞絨のやうな細かな突起があつて、その間に空氣を含んでゐて、雨を防ぐ用意が十分に出來て居るからである。それで、雨に當ると水玉が葉の表面に溜つて、眞に珠玉のやうに光る。これは水玉の底の空氣が悉く光線を反射するからである。芋の葉もこれと同じで、雨に濡れぬやうになつて居るから、急雨の時に見ると面白い。すべて雨の多い國にあつた植物は、たとひ外國に移植されても、矢張雨の降る折に觀なければ、その特性と趣が解らない。

雪にも亦相應する植物がある。雪は寒國に多く降るものであるから、寒地の植物はいづれも雪に適して居るが、暖地の植物にも雪のかゝつた景色の面白く見えるのがある。

常磐木の類、例へば樅・杉・松などか雪の間から濃綠色の葉を現し、南天燭が純白の雪の中に赤い實を著けてゐる樣などは、色の配合上頗る美觀である。又松に雪の積つたのもわるくない。太い逞しい枝が雪の重みに抵抗して居るのは殊に趣が深い。竹は松とは違つて、幹がしなやかで强いから、いかなる雪にも曲るばかりで折れることは少ない。これもまた一種の風情がある。枯木に雪の積つた景色、これがまた時ならぬ花盛とも見えて、棄てられぬ詠である。總べて落葉木は枝振が樣々であるから、雪の積つた時には形の變化が多くて、いかにも趣がある。(植物生態美觀)

七　空行く鴈 その一

伊豆の國赤澤山の麓に、工藤左衞門祐經に討たれし河津三郎が子二人あり、兄をば一萬といひて五つになり、弟は箱王といひて三つにぞなりにける。父におくれて後いづれも母に副ひて繼父の曾我太郎祐信が許にあり。漸く成人する程に、父のかたき祐經がことを人の語れば兄も知り、兄が語れば弟も知りぬ。心のつくまゝにいと安からずぞ思ひける。

頃は人皇第八十一代安德天皇の養和元年、あらたまの年立歸りて、一萬は九つ、箱王は七つにぞなりにける。或夕暮箱王は母の膝の上に戲れながら、「いかに母御前、父はいづくに

(一) 祐泰。
(二) 伊東祐親―河津祐泰―一萬
―十郎(祐成)
―箱王(時致)

おはしますぞや。其の佛は何國にましますぞや。行きて拜み奉らばや。母御前、いざさせたまへ。」といひければ、遙かに忘れたる空も今更思ひ出されて、消え入るばかりなり。母泣く〳〵のたまひけるは、「あの曾我殿こそ己等が父にてあれ。」と心強く語られけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。箱王重ねて申しけるは、『父御前は』まことやらん『狩場より歸りたまふ道にて工藤一臈とやらに射られて死に給ひぬ。』と兄御前は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿のきりものにて鎌倉より伊豆へ下る時もあり、伊豆より鎌倉へ上る時もありとや。我等をも殺さんとや思ふらん。我等が此の里にあるを知らでや過ぐらん。」など大人しく語れば、母

源頼朝。

より始めて女房たちまで皆袖をぞ絞りける。

かくて夏も過ぎ、秋も闌け、九月十三夜の月隈もなかりけるに、兄弟二人庭に出でて遊びけるに、五つ連れたるかりがねの南をさして飛び行くを見て、一萬申しけるは、「あれ見給へ、箱王殿。空に飛ぶ翼も別の翼ぞまじへぬ。五つあるは一つは父、一つは母、三つは子供にぞあるらん。物いはぬ鳥類だにかくの如し。我等人倫に生れながら、和殿は弟、我は兄、母は實の母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬこそ悲しけれ。我等が父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬・鞍をも賜はり、弓・矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなん。我々より幼き者も

馬・鞍・弓・矢を以て物を射ありく事の羨ましさよ。　此等の事ども思ひ續くれば、いつよりも今宵は父御前の戀しく思ひまゐらせらるゝぞや」とて袖に顔をさし入れてさめ〴〵と泣きければ、弟も小賢しく顔を合せて泣き居たり。　一萬の乳母の女房これを聞きて「あなあさまし、人もこそ聞け、いかに和上禰たち、夜も更けぬるに、さやうにはおはするぞ。　とくとく入らせたまへ」と恐しげにいひければ、二人の者は門外に逃げ出でて、思ふやうに飽くまで泣きて後に、内に入りにけり。

其の後は二人の者ども我が身の程を知りぬれば、世になき父を慕ひつゝ語りあはするまではなけれども、唯目ばかりを見合せて互に袖をぞ濡しける。　未だ十歳にも滿たざるに哀は深く思ひ知りけり。

或時兄弟は竹の小弓、薄刈の小矢をとり副へて遠侍に出でて遊びけるが、あかり障子のありけるに二人立ちむかひ、あなたこなたに射通して一萬、箱王に申しけるは、「我等もいつか成長して、和殿は十三、我は十五にだにもならば、如何ならん野山にてもあれ、親のかたき祐經をかくの如く刺し合ひ、射とりて後にはともかくもなりなん。　和殿も弓をよく射習ひ給へ、我も習はん。　弓矢は男の一の能にてあるなるぞ」。といひければ、弟もうちうなづきけり。（曾我物語）

八　空行く鴈 その二

ある人一萬が乳母にこのよしを語りければ、乳母大きに驚きて母に申せば、母も仰天して二人の子供を呼び寄せ、泣く泣く語られけるは、「まことか、己等は此の恐しき世の中に謀叛を起さんと議し合ふとや。若し人の耳に入りなばいと惡しかるべし。汝等よく〳〵聞け。己等が祖父伊東入道殿は當鎌倉殿の若君千鶴御前を松河が淵に沈め奉れるゆゑに御敵となりて、先年伊東の館に失はれ給ひぬ。己等かかる謀叛人の孫なれば、かたき左衛門尉、上の御敵に申しなして失はれぬべし。其の時千度百度悲しむとも叶ふべしや。其の上汝等が鎌倉殿へ召されし時も、曾我殿歎き申して留りたり。其の故は、鎌倉殿石橋山の合戰に打負けて杉山へ入らせ給ふ時、梶原景時と曾我殿と二人心を合せて助け奉りしゆゑに、駿河國八郡の大名になされし其の御恩を皆返しまゐらせて、『二人の幼きものどもを助けてたまはらん。』と申しければ、鎌倉殿憐ませ給ひて、『それ程の志ならば、二人の子供祐信に預くるぞ。』と仰せられける故にこそ汝等も安穩にて今まで希有の命を持ちたるぞ。それにつきても曾我殿の芳恩をば生々世々にも報じ盡すべきか。恩を知ることは鳥類・畜類にてもそのいはれありとこそ聞け、況や汝等人倫に於てをや。かゝる大恩をばいかでか報ぜざるべき。然るを卻て曾我殿に歎きを與ふべしとは返す〳〵

(一) 伊東祐親。
(二) 伊豆。
(三) 工藤祐經。

も口惜しかるべし、其の恩を報ぜんと思はゞ速に謀叛をとゞむべし。就中鎌倉殿の御耳に達するものならば暫くも安穩にて有るべきか。命ありてこそ謀叛をも起すべけれ。また其の心あるべからず」と口說きたてゝ誡められければ、二人の子ども目と目とを見合せて顏うち赤めて立ちにけり。

それより後は、人の聞かぬ所にては內々談議しけれども、人目に顯れては語り合する事もなし。かくて年月を送るほどに、一萬十三、箱王十一にぞなりにける。まだ一つの牀に臥しけるが、秋の比人の聞くとも知らずして敵の事を語り合ふ。曉かけての事なれば、母ものごしにて之を聞きつけて、二人の子供を又呼びよせて「いかに汝等は我がいふ事をきかぬぞ。平家亡びし時は腹の內の子供まで探し出して失はれしぞかし。ましして己等が事かたはしばかりも若し鎌倉殿の御耳に入らば、首手足をも刎ねられん。夢にもその心根を持つべからず」と制せられければ、その後はいよいよ謹みて語り合ふ事もなく、或は上の山かげに隱れ、或は後の竹の中に忍びてさゝやきなんどせし程に、二人つれて見えぬ時は「例の事よ」と人々いひ合ひけり。母も內々おそろしき者どもの心ざまかなと思はれければ、弟の箱王をば出家にせんとぞ思はれける。

兄の一萬十三と申す十月半ばの比、男になして繼父の片名

を取りて曾我十郎祐成とぞ呼ばれける。是につけても母の悲しさ堪へ難し。「彼等が父世にましまさば河津の何がしとこそ呼ばるべけれ。思ひもよらぬ他家の名字を取ることよ」と、祝の座席とは申せどもうち涙ぐみてぞ見えける。弟の箱王も十一歳となりにけるが、膝元近く呼び寄せて、「汝が父元來箱根の權現を信じ給ひし故に御事をも箱王と呼ばれたり。されば箱根の別當のもとに行きて學問よくして法師になり、父の孝養をもねんごろにし、わらはが後の世をも助くべし。男になりては汝が爲にも心ぐるしかるべし。我も亦よしなき事と思ふべし。汝よく〳〵思慮すべし。父母の恩の辱き事は定めて存知したるらん」とて髮を

行實。

かなでて泣く〳〵申さるれば、箱王も泣く〳〵「かしこまり候。父の此の世におはせぬと承りしより以來は、先の世にいかなる罪を作りてか父といふこと知らざるらんと、人知れぬ涙のみ露けく候ひしに、かやうの御諚を承る、ともかくも仰に從ひ候ふべし」とて立ちにけり。母をはじめまゐらせて有り合ふ人々みな袂をぞ絞りける。其の後母も曾我殿も大いに悅びて、小袖・直垂・大口なんど用意して文治元年乙巳の年十一月半ばの比箱根の山へぞのぼせける。

（曾我物語）

九　伊藤公ヲ誄ブ

井上馨

明治四十二年十月二十六日、我ガ友樞密院議長伊藤博文公韓國兇徒ノ狙擊スル所トナリ、暴ニ清國吉林省哈爾賓驛ニ斃ズ。嗚呼哀シイカナ。予何ゾ多言スルニ忍ビン。然リト雖モ、予君ト交ル五十餘年、異體同心、生死苦樂ヲ共ニシ、國歩艱難ノ秋ニ始リ、太平富貴ノ日ニ至リ、終始渝ルコト莫シ。自ラ謂フ「交友ノ誼今古ニ愧ヅル無シ」ト。予遂ニ復一言セズシテ止ム可カラズ。予君ニ長ズルコト六年、君予ノ歿死ヲ哭スルコト二回、予幸ニ君ノ交情看護ニ因ッテ再生スルヲ得タリ。料ラザリキ、今日反ッテ君ノ葬ヲ送ラントハ。嗚呼哀シイカナ。

回憶スレバ四十七年前、文久癸亥ノ仲夏、君予ト偕ニ發憤シテ海軍ノ術ヲ學バントシ、禁ヲ犯シ、潛ニ泰西ニ航シ、居ルコト纔ニ半年餘、馬關・鹿兒島ノ攘夷ヲ聞キ、意ヲ決シテ急ニ還リ、首トシテ開國ヲ倡ヘ、故國ヲ危難ヨリ脫セシム。内訌尋イデ起リ、予ハ暗夜要擊ニ遭ウテ殆ド死シ、君ハ高杉ヲ助ケテ兵ヲ擧ゲ、藩論ヲ回復シ、我ガ一大危機ヲ轉過セリ。已ニシテ王政復古、乃チ徵士ニ擧ゲラレ、版籍奉還ノ際、君、木戸・大久保二公ヲ佐ケテ尤モ力アリ。維新ノ績此ヨリシテ破竹ノ如シ。進取ノ宏謨

伊藤博文

(一) 高杉晉作。
(二) 木戸孝允。
(三) 大久保利通。

ヲ翼賛シ、維新ノ大業ヲ成就ス。敕ヲ奉ジテ憲法ヲ創定シ、長ク國家ノ本ヲ固クシ、其ノ他、法律・制度ノ設、緊ネ君ニ俟タザル莫ク、洵ニ組織ノ才ヲ推ス。四度總理大臣トナリ、勳業ノ盛ヲ極メ、首メニ韓國統監トナリテ保護ノ範ヲ立ツ。

君學漢洋ヲ該ネ、識東西ニ通ズ。尤モ東洋ノ平和ヲ以テ念ト爲シ、常ニ忠節・道義ヲ以テ淬礪シ、王臣匪躬ヲ以テ自ラ任ズ。故ニ國民ハ仰イデ文治ノ宗ト爲シ、外人ハ視テ平和ノ表ト爲ス。留韓四年、歸來未ダ曾テ寧處セズ。年七十ニ垂ントシテ、一歳ノ行萬哩ヲ期シ、節冬寒ニ向ヒ、北滿ノ野ニ見學ス。忠君報國ノ厚キニ非ズンバ孰カ能ク此ノ如クナラン。豈謂ハンヤ、君ノ忠節ニシテ茲ノ不測ニ遭ヒ、暴ニ異邦

*王臣蹇々匪躬之故。

ノ地ニ斃ゼントハ。嗚呼哀シイカナ。

君ノ訃電聞ス。皇上震悼敕シテ國葬ヲ行ハシメ、白叟・黄童・織婦・耕夫モ哀悼セザル莫ク、乃チ外國帝王・大統領・大臣・紳士ニ至ルマデ親シク弔電ヲ發シ、我ガ不幸ヲ言ハザル莫ク、内外新聞爭ウテ君ノ才德・勳業ヲ稱贊シ、中外著望ノ盛、振古未ダ君ノ如キニ比スルアラザルナリ。抑、予ハ又之ニ因リテ吾ガ國民ニ望ムコトアリ。誠ニ君ノ死ヲ哀シマバ、則チ宜シク學國一致、盡忠報國、東洋ノ平和ヲ維持スルニ務メ、以テ君ノ志ヲ紹グベシ。古人云フ、「匪ニ以報公、維以報國、死者復生信ニ我此言ヲ」。庶ハクハ君ヲシテ瞑セシムルヲ得ン。嗚呼哀シイカナ。

一〇 血氣を戒む

吉田松陰

平時喋々臨事必唖平時笑ふ臨事必滅孟子助長の害を論ずるを見るべし

(一)八十送行の時諸友拔劍の事あり此の頃また暢夫(二)が江戸に在りて斬犬の事あるを聞く是等の事ありて諸友氣魄衰萎の程を知るべし僕今死生全く念頭に絶えぬ自ら信ず斷頭場に登り候はば血色敢て諸氏の下にあらじと然れども

(一)佐世八十郎。前原一誠の前名。
(二)高杉晉作、字は暢夫。

平時は大抵閑事外一言せず一言すれば必ず温然たる和氣婦人少女の如し是氣魄の源なり慎言謹行(持ち神)なるべし大氣魄は出づるものにあらず張良(*)鐵椎當時の面目を想ひ見るべし僕去月二十五日より一臠の肉一滴の酒をたづさへだに氣魄を增さんと大なり僕已に諸友に絶つ諸友亦僕に絶てり然れども平生の友誼のため區々一言を發せず是僕が鑿

(*)張良、博浪沙中に於て、秦の始皇に鐵椎を擲つ。

鑿金(ノミ)

空の語にあらぞ聖賢傳心の教なれば
輕視まほことなかれ
血氣だも是事を害を暴怒亦是事を害す
血氣暴怒を粉飾まほその害更に甚だし
中谷久坂高杉等に傳へ示したく候

（維新史料）

*久阪義助、松陰の妹婿。

一一　佛領に於ける支那人　竹越三叉

佛人が西貢の炎熱に苦しむに方りて、支那人は平然として生活し繁殖し、其の利權を佛國旗の下に樹立せり。世人は交趾支那と云へば直ちに西貢を聯想すれども、西貢よりも人口饒多なる都會の其の附近にあるを知らざるなり。

都會とは何ぞ。提岸是なり。提岸は西貢より西北四哩の地にありて、人口十六萬を數へ、今は西貢と同市を作れり。而して此の中支那人の數四萬二千を數ふるに至りては、また盛なりといはざるべからず。此の地方の產物は米を大宗とす。提岸は運河によりて土產を集散する中心市場にして、運河の兩岸に大小の精米所林立せり。而して其の事業の大半は支那人の掌中にあり。

余は提岸視察の際、八萬五千以上の安南土人が大半支那人に壓伏せられ、利權を吸收せらるゝさまを見て悲慘の感に

勝へざるものありき。然れども兩人種の容貌・體格の遙かに相異なるを見ては、また如何ともすべからざるものあるを認むるの外なし。余は唯支那人身心の雄偉を嘆美するのみ。支那人は唯此の地に於て優者たるのみならず、佛領印度支那全體に散在し、南は安南より北は東京に至るまで、マレー人の國に於ける經濟上の權力を一手に掌握し、佛人は單に其の上に立ちて政權を攬れるのみ。

其の土人の樣を見るに、瓜哇其の他のマレー人の如く脣頭朱紅を帶び、齒は木欒子の如く黑く、一見して其の檳榔子を嚙むものなるを知るを得べし。然れども其の衣服を見るに、明代支那の衣服にして、恰も朝鮮服に似たるものあり。

其の土酋の佛人化せざるものゝ衣服に至りては、益、明代の儒服に近きを覺ゆ。又其の寺院の荒草中に埋沒したるものは、純然たる印度風にして、王宮等の廢跡には、支那李唐時代の遺風の存するより見れば、印度と支那との文明は、此の地に於ても亦瓜哇の如く兩々相湊合したるものなるを見るべく、其の國を交趾と號し、或は安南と號し、更に大越と號し、支那流の年號を立てしより見れば、宗教は印度に則り、政治は支那に則りきと云ふを以て適當なりとすべきか。清初交趾の使支那に至り、西湖に遊び、咀嗟筆を取りて、

一樹楊柳幾度花、醉飲西湖賣酒家。
我國繁華不如此、春來滿地是桑麻。

と詠じたりと云ふより見れば、清初已に支那の學問が土人の間に普及したりしを知るべし。

支那人の此の國に於ける、一日行旅の關係にあらざること此の如し　然らば則ち佛人の此の國を治むる、理宜しく支那人を寛容し、勢宜しく支那人と協同すべし。然るに事實を見れば、支那人は此の國内に於てもまた壓迫抑制せらるること瓜哇に於けるが如し。余は此の間に於て、英・佛兩國植民政策の異同を感ずること殊に切なるものありき。

（南國記）

一二　相模灘の落日

徳富蘆花

*相模國三浦郡。

秋冬、風全く凪ぎ天に一片の雲なき夕、逗子の海濱に立つて伊豆の山に落つる日を望むに、世にかゝる平和のまた多かるべしとは思はれず。

日の山に落ちかゝりてより、其の全く沈み終るまで、三分時を要す。日の西に傾くや、富士を初め相豆の連山煙の如く淡し。日更に傾くや、富士を初め相豆の連山次第に紫になるなり。日更に傾くや、富士を初め相豆の連山、紫の肌に金煙を帯ぶ。此の時濱に立つて望めば、落日海に流れて吾が足下に到り、海上の舟は皆金光を放ち、逗子の濱一帯、山といはず、沙といはず、家といはず、松といはず、人といはず、轉がりたる生簀の籠も、落ち散りたる藁屑も、赫焉として燃えざる

はなし。

かゝる風の夕に落日を見る身は、恰も大聖の臨終に侍する感あり。莊嚴の極、平和の至。物あり、融然として心に浸む。喜といはんは過ぎ、哀といはんは未だ及ばず。

已にして日愈〻落ちて伊豆の山にかゝるや、相豆の山忽ちに藍色に變ず。唯富士の巔、舊に仍つて紫の上に更に金光を帶ぶるのみ。

伊豆の山已に落日を銜み初めぬ。日一分を落つれば海に浮べる落日の影一里を退く。日は迫らず、寸又寸、分又分、別れ行く世をば顧みがちに悠々として落ち行く。

已にして殘り一分となるや、急に落ちて眉となり、眉切れて線となり、線瘠せて點となり、忽ちにして無し。眼を上ぐれば世界に日なし。光消えて、海も山も蒼然として憂ふ。日は入りぬ。しかも餘光の忽ち箭の如く上射し、西空、金よりも黃なるを見ずや。偉人の歿せる後、實にかくの如し。

日の落ちたる後は富士もほどなく蒼ざめ、やがて西空の金は朱となり、燻りたる樺となり、上りては濃き藍色となり、日の遺蘖とも思はるゝ明星の、次第に暮れ行く相模灘の上に眼を開きて明日の出日を約するが如きを見るなり。

（自然と人生）

一三　四季の月

石川依平

梅咲く園にこもりみつゝ
曇りもはてぬ朧夜は
峯のさくらの花ぐもり、
月こそ春のむかりかを。
初音待つ夜の枕をも、
閨の戸をゝでぬかもあも。
まゞしきほどの杜鵑
なきて涼しき月かげよ、
桐の葉もけに影見にて
秋とほのめく夕より
たち待ち居待ち待ちとりて、
幾夜の月を眺めけん。
木の葉ぬりしく山の端は
時雨はくもり、おもはゆ、
雪にてり添ふ月かげ哉
などすゞまぬと思ふべし。

（一）てりもせず、くもりもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき。
（二）さつき來ばなきもふりなん、杜鵑まだしきほどの聲を聞かばや。

一四　乙若その一

（一）藤原資長。
（二）秦野次郎延景。

さる程に、内裏より卽ち義朝を召され、藏人右少辨資長朝臣を以て仰せ下されけるは、「汝が弟どもの未だ多くあるなるを、縱ひ幼くとも女子の外は皆尋ねて失ふべし。」となり。宿所に歸つて秦野次郎を召して宣ひけるは、「餘りに不便なれども、敕諚なれば力なし。母か乳母か懷きて山林に逃げ隱れたらんは、如何せん。六條堀河の宿所に在る當腹の四人をば賺し出して、相構へて道の程侘びしめずして舟岡にて失へ。」とぞ聞えける。延景、「難儀の御使かな。」と心憂く思へども、主命なれば力なし、涙を袖に收めつゝ、泣く〳〵輿を舁か

せて彼の宿所へぞ赴きける。

母上は折節物詣での間なり。公達は皆おはしけり。兄を

ば乙若とて十三、次は龜若とて十一、鶴若は九つ、天王は七つ

なり。此の人々、延景を見附けて嬉しげにこそありけれ。

秦野次郎、(一)入道殿の御使に參つて候。殿は十七日に比叡山

にて御様を變へさせ給ひて、頭殿の御許へ入らせ給ひしを、

世間も未だつゝましとて、北山雲林院と申す處に忍びて渡

らせ給ひ候が、公達の御事覺束なく思召し候間、御見參に入

れ奉らん爲に、具し奉つて參らんとて御迎に參つて候。と申

せば、乙若出で合ひて、「誠に様變へておはしますとは聞きた

れども、軍の後は未だ御姿を見奉らねば、誰々も皆戀しくこ

(一)檢非違使尉源爲義。

(二)保元元年七月。

(三)左馬頭源義朝。

そおもひ侍れ。」とて、我先にと輿に爭ひ乘られけるこそあは

れなれ。これを冥途の使とも知らずして各輿どもに向ひ

つゝ、「急げや、急げ」と進みけり。羊の歩近づくを知らざりけ

るこそ果敢なけれ。大宮を上りに舟岡山へぞ行きたりけ

る。

峯より東なる所に輿舁き据ゑて、「如何せまし。」と思ふ處に七

つになる天王走り出でて、「父は何處におはしますぞ。」と問ひ

給へば、延景涙を流して、暫しは物も申さゞりしが、良あつて、

「今は何をか隱し進らすべき。大殿は頭殿の御承にて、昨日

の曉斬られさせ給ひ候ひき。御舍兄たちも八郎御曹司の

外は、四郎左衛門殿より九郎殿まで五人ながら、夜べ此の表

に見えて候山本にて斬り奉り候ひぬ。公達をも失ひ申すべきにて候。相構へて賺し出し進らせて侘びしめ奉らぬ様にと仰せつけられ候間、入道殿の御使とは申し侍るなり。思召す事候はゞ、延景に仰せ置かせ給ひて、皆御念佛候べし。」と申せば、四人の人々是を聞き、皆輿より下り給ふ。

九つになる鶴若殿、「下野殿へ使を遣はして、「如何に我等をば失ひ給ふぞ。四人を助け置き給はゞ、郎等百騎にも勝りなんずるものを。」此の由申さばや。」と宣へば、十一歳になる龜若、「誠に今一度人を遣はして、慥に聞かばや。」と申されける處に、乙若殿生年十三なるが、「あな心憂の者共の云ひがひなさや。我等が家に生るゝ者は幼けれども心は猛しとこそ申すに、

*義朝前に下野守たり。

かく不覺なる事を宣ふものかな。世の理をも辨へ、身の行末をも思ひ給はゞ、六十に成り給ふ父の、病氣に因つて出家遁世して憑みて來り給ふをだに斬る程の不當人の、況して我々を助け給ふことあらじ。あはれ果敢なき事し給ふ頭殿かな。是は清盛が和讒にてぞあるらん。多くの弟を失ひ果てゝ、只一人になして後、事のついでに滅さんとぞ計らふらんを曉らず、只今我が身も失せ給はんこそ悲しけれ。二三年をも過し給はゞ、幼かりしかども乙若が舟岡にてよく云ひしものをと、汝等も思ひ合せんずるぞとよ。さても下野殿撃たれ給ひて後、忽ちに源氏の世絶えなんことこそ口惜しけれ。」とて、三人の弟たちにも、「な歎き給ひそ。父も撃

たれ給ひぬ。誰か助けおはしまさん。兄たちも皆斬られ給ひぬ。情をも懸け給ふべき頭殿は敵なれば、今は定めて一所懸命の領地もよもあらじ。然れば命助りたりとも、乞食流浪の身と成りて、こゝかしこに迷ひ行かば、彼こそ爲義入道の子どもよと、人々に指をさゝれんは家の爲にも恥辱なり。父戀しくば、只西に向つて南無阿彌陀佛と唱へて、西方極樂に往生し、父御前と一つ蓮に生れ合ひ奉らんと思ふべし。」と、大人しやかに宣へば、三人の君だち各西に向つて手を合せ禮拜しけるぞあはれなる。是を見て五十餘人の兵も皆袖をぞ濡しける。（保元物語）

一五　乙若その二

此の公達に各一人づつ傅共附きたりけり。内記平太は天王殿の傅、吉田次郎は龜若、佐野源八は鶴若、原後藤次は乙若殿の傅なり。差寄つて髮結ひ上げ、汗拭ひなどしけるが、年來日來宮仕へ、旦暮に撫ではだけ奉りて、只今を限りと思ひける心どもこそ悲しけれ。されば聲を擧げて叫ぶばかりにありけれども、幼き人々を泣かせじと抑ふる袖の間よりも餘る涙の色深く、包む氣色も顯れて、思ひ遣るさへあはれなり。

乙若、延景に向つて、「我こそ先にと思へども、彼等が幼心におぢ恐れんも無慙なり。又云ふべき事も侍れば、彼等を先に

立てばや。」と宣ひければ、秦野次郎太刀を拔いて後へ廻りければ、傳ども「御目を塞がせ給へ。」と申して皆退きにけり。卽ち三人の首前にぞ落ちにける。

乙若是を見給ひて少しも騷がず「いしう仕りつるものかな。我をもさこそ斬らんずらめ。さて彼は如何に。」と宣へば、行器を持たせて參りたり。手づから此の首どもの血の附きたるを押し拭ひ、髮搔き撫で、「あはれ無慙の者どもや。か程に果報少なく生れけん。只今死ぬる命より、母御前の聞召し歎き給はん其の事を豫て思ふぞたとしへなき。乙若は命を惜みてや後に斬られけると人言はんずらん。全く其の儀にてはなし。斯樣の事を云はんにつけても、又我が斬

られんを見んにつけても、泣き留りたる幼き者の、又泣かんも心苦しくて言はぬなり。母御前の今朝八幡へ詣で給ふに『我も參らん。』と申せば、皆『參らん。』と云へば、『具せば皆こそ具せめ。具せずば一人も具せじ。片恨みに。』とて、我等が寢たる閒に詣で給ひしが、下向にてこそ尋ね給ふらめ。我等かかるべしとも知らざりしかば、思ふ事をも申し置かず、形見をも進らせず、只入道殿の呼び給ふと聞きつる嬉しさに、急ぎ輿に乘りつるばかりなり。されば是を形見に奉れ。」とて、弟どもの額髮を切りつゝ、我が髮を具して、若し違ひもやせんずとて、別々に包み分けて、各其の名を書附けて、秦野次郎に給ひけり。

「又詞にて申さんずる様はよな。今朝御供に參りなば、終には斬られ候とも、最後の有様をば互に見もし、見え進らせ候はんずれども、なか〳〵互に心苦しき方も侍らん。御留守に別れ奉るも一つの幸にてこそ侍れ。此の十年餘りの間はかりそめに立ち離れ進らすることも侍らぬに、最後の時しも御見參に入らねば、さこそ御心に懸り候らめ。なれども、且は八幡の御計らひかと思召して、痛くな歎かせおはしましし候ひそ。親子は一世の契とも申せども來世は必ず一つ蓮に參り逢ふやうに御念佛候べし。」とて、「今は此等が待ち遠なるらん、疾く〳〵。」とて、三人の死骸の中へ分け入つて、西に向ひ、念佛三十遍ばかり申されければ、首は前へぞ落ちに

ける。

四人の傅ども急ぎ走り寄り、首もなき身を抱きつゝ、天に仰ぎ地に伏して喚き叫ぶも理なり。まことに涙と血と相和して流るゝを見る悲みなり。内記平太は直垂の紐を解きて天王殿の身を我が膚に當てゝ申しけるは、「此の君を手馴れ奉りしより後は一日片時も離れ進らすることなし。我が身の年の積ることをば思はず、早く人と成らせ給へかしと、明け暮れ思ひて育み進らせ、月日の如くに仰ぎつるに、只今かゝるめを見ることの心憂さよ。常は我が膝の上に居給ひて髭を撫でて、『何時か人と成りて國をも莊をも設けて知らせんずらん。』と宣ひしものを、假寐の寐覺にも内記々々

と呼ぶ御聲、耳の底に留り、只今の御姿幻にかげろへば、更に忘るべしとも覺えず。是より歸りて命生きたらば、千年萬年を經べきや。死出の山、三途の河をば誰かは介錯申すべき。恐しく思召さんにつけても、まづ我をこそ尋ね給はめ。生きて思ふも苦しきに、主の御供仕らん。」と云ひも果てず腰の刀を拔く儘に、腹搔き斬つて失せにける。格勤の二人ありけるも、「幼くおはしましゝかども情深くおはしつるものを、今は誰をか主と憑むべき。」とて、刺し違へて二人ながら死にけり。此等六人が志、類なしとぞ申しける。同じく死する道なれども、合戰の場に出でて主君と共に討死し腹を切るは常の習なれども、かゝる例は未だなしとて譽めぬ人こ

三途の河
火途（地獄）
刀途（餓鬼）
血途（畜生）
庶士ノ最期卓ヒヤノ

そなかりけれ。此の首ども渡すに及ばず、餘りに父を戀しがりければとて圓覺寺*へ送りて入道の墓の傍にぞ埋めける。（保元物語）

*京都市岡崎町の南にその地名を存す。平安神宮の近傍なり。

一六　近郊の晩秋

正岡子規

朝日障子にあたりて、蜻蛉の影暖かなり。世の人は上野・淺草・團子阪とうかるめり。我も出でなんや出でなん。病のつのらばつのれ。待たばとて出でらるゝ日の來るにもあらばこそ。「車呼びて來よ。」といふ。やがて歸りて「車は皆出ではらひたり。遠くに雇はんや。」といふ。「さまでは。今日の日和には、足ある人ぞまづ車にて出でたる。」と笑ふ。

一時過ぎて車は來つ。車夫に負はれて乘る。成るべく靜かに挽かせて鶯横町を出づるに、垣に咲ける紫の小さき花の名も知らぬが、まづ眼につく。

空忽ち開く。村々の木立遠近に連なりて、右には千住(一)の煙突四つ五つ黑き煙をみなぎらし、左は谷中(二)・飛鳥(三)の岡續きに天王寺の塔聳えたり。見渡す限り眉墨ほどの山もなければ、平地の眺めの廣さ、我が國にてはこれ程の處外にはあらじと覺ゆ。胸開き氣伸ぶ。

田は半ば刈らずあり。刈りたるは皆田の緣に竹を組みてそれに懸けたり。我が故郷(四)にては稻のみのる頃は田の面乾きて水なければ、刈穗は悉く地干にするなり。此の邊の

(一) 東京府北豐島郡千住町。
(二)(三) 共に東京の東北なる一帶の低き岡。
(四) 伊豫の松山。

百姓はおとし水の味を知らざるべし。吾には此の掛稻がいと珍しく感ぜらる。榛の木にかけたるは、殊に趣あり。

其の上より森の梢、塔の九輪など見えたるは、更に面白し。

道の邊に咲けるは蓼の花ぞ最も多き。其の紅の色の老いてはげかゝりたる中に、處々野菊の咲きまじれる樣ふるひつくばかり嬉し。

我が車の響に野川の水のちら〳〵と動くは目高の羣の驚きて逃ぐるなり、あないとほし。目高を見れは野遊びのめあての一つなるを、なべての人は目高ありとも知らで過ぐめり。世に愛でられぬを思ふにつけて、いよ〳〵いとほしさぞ優るなる。

小鮒にやあらん、すばやく逃げ隱れたる、憎し。たま〳〵に蛭の浮きたるは無くもがな。

むかふより人力車來れり。見れば、男一人乘りて前に藁苞を置きたる、その端より黃なる實の漏れて見ゆるは蜜柑か、金柑か。一足、町を離るれば、見るもの皆雅なり。

柿の樹に柿の殘りたるはあちこちにあり。一つ食ひたし。

烏瓜の蔓に赤き實の一つだに殘りたるを見ず。

日高多き小川を過ぐ。

童二人、とある門の內より「人力、々々。」とわめく。

諏訪神社の茶店に腰を休む。日傾き風俄に寒くなりたれば興盡きて歸る。（ほとゝぎす）

*東京府北豐島郡日暮里村にあり。

一七　常磐樹

島崎藤村

あら雄々しきかな、傷ましきかな、
かの常磐樹の落ちず枯れざる。
常磐樹の枯れざるは、
百千の草の落つるより
傷ましきかな。
其の枝にかゝる朝の日、
其の幹をめぐる夕月、
など行く旅の迅速なるや、
など電の影と馳するや。

蝶の舞ひ、花の笑ひ、
など遊ぶ日の世に短きや、
など其の醉の早く醒むるや。
蟲、草の葉に悲しめば、
一時にして既に霜。
鳥、潮の音に驚けば、
一時にして既に雪。
木枯高く秋落ちて、
自然の色はあせゆけど、
大力天を貫きて、
坤軸遂にやすみなし。

ものみな速くうらかれて、
長き寒さも知らぬ間に、
汝千歳の時に嘯き、
獨り立てるは何の力ぞ。
白銀の花霏々として
吹雪の煙闇き時、
汝綠の蔭も朽ちせず、
空を凌ぐは何の力ぞ。
立てよ、友なき野邊の帝王、
ゆゝしく高く立てよ、常磐樹。
汝の長き春なくば、

山の命も老いなんか。
汝の深き息なくば、
谷の響も絶えなんか。
あしたには葉をうつ霙、
ゆふべには枝うつ霰、
千草も知らぬ冬の日の
嵐に咽ぶうきなやみ、
いづれの日にか
氷は解けて、
その葉の涙
消えんとすらん。

あゝ、よし、さらば、枝も摧けて、
綠の色の落ちなん日まで、
雲浮かば無縫の天衣、
風立てば不朽の緒琴、
おごそかに
立てよ、常磐樹。
あら、雄々しきかな、傷ましきかな、
かの常磐樹の落ちず枯れざる。
常磐樹の枯れざるは、
百千の草の落つるより
傷ましきかな。（藤村詩集）

正平二年。

一八　如意輪堂

阿部野の合戰は霜月二十六日の事なれば、渡邊の橋よりせき落されて流るゝ兵五百餘人、かひなき命を楠木に助けられて、河より引き上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の冰膚に結びて、生くべしとも見えざりけるを、楠木情ある者なりければ、小袖を脱ぎ替へさせて身を溫め、藥を與へて創を療せしむ。かくの如く四五日皆勞りて、馬に乘る者には馬を引き、物の具失へる人には物の具を著せて、色代してぞ送りける。されば敵ながらその情を感ずる人は、今日より後心を通ぜんことを思ひ、その恩を報ぜんとする人は、軈て彼

譽田林の戰及び阿部野の戰。

足利尊氏。

の手に屬して、四條縄手の合戰に討死をぞしける。

さても今年兩度の合戰に、京勢無下に打負けて、畿内多く敵の爲に侵し奪はる。遠國亦蜂起しぬと告げければ、將軍左兵衛督の周章只熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏、國々の催し勢なんどを向けては叶ふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直、越後守師泰兄弟を兩大將にて四國・中國・東山・東海二十餘箇國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く淀・八幡に著きぬと聞えしかば、楠木帶刀正行、舍弟正時、一族打連れて、十二月二十七日芳野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、「父正成庇弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を休めまゐらせ候ひし後、天

*延元元年五月十七日。

下程なく亂れて、逆臣西國より攻め上り候間、危きを見て命を致す所、かねて思ひ定め候ひけるかに依りて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ了んぬ。その時、正行十一歳に罷り成り候ひしを、合戰の場へは伴はで、河内へ歸し、「死に殘り候はんずる一族を扶持し、朝敵を亡し、君を御代に卽けまゐらせよ。」と申し置きて死にて候。然るに正行・正時已に壯年に及び候ひぬ。この度我と手を碎き合戰仕り候はずば、且は亡父の申しゝ遺言に違ひ、且は武略のいひがひなき謗に落つべく覺え候。有待の身、思ふに任せぬ習にて病に犯され早世仕る事候ひなば、只君の御爲には不忠の身となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、今度師直・師泰にかけ合ひ、身命を盡し合戰仕りて、彼等が頭を正行が手に懸けて取り候か、正行・正時が首を彼等に取られ候か、其の二つの中に戰の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顏を拜し奉らん爲に、參内仕りて候」と申しもあへず、涙を鎧の袖に懸けて、義心其の氣色に顯れければ、傳奏未だ奏せざる前に、まづ直衣の袖をぞ濡されける。

主上則ち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顏特に麗しく、諸卒を照臨ありて、正行を近く召して、「以前兩度の戰に勝つことを得て敵軍の氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功返す〳〵も神妙なり。大敵今勢を盡して向ふなれば、今度の合戰天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機

に應ずる事は、勇士の心とする所なれば、今度の合戰命を下すべきにあらずといへども、進むべきを知りて進むは時を失はざらんが爲なり、退くべきを見て退くは、後を全うせんが爲なり。朕汝を以て股肱とす、愼んで命を全うすべし」と仰せ出されければ、正行頭を地に著け、とかくの敕答に及ばず、只これを最期の參內

楠正行髻塚

なりと思ひ定めて退出す。

正行・正時・和田新發意・舍弟新兵衛以下今度の軍に一足を引かず一處にて討死せんと約束したりける兵百四十三人先*皇の御廟に參りて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各名字を過去帳に書き連ねて、その奥に、

おへらじ空かゝて思へば、梓弓
なき數にいる名をぞとゞむる。

と、一首の歌を書き留め、逆修の爲と覺しくて、各鬢髮を切りて佛殿に投げ入れ、その日吉野を打出でて敵陣へとぞ向ひける。（太平記）

*後醍醐天皇御陵。

一九　熊王の發心

隱士松翁

大夫判官赤松光範が津の國のかためなりける時、左馬頭正儀に度々はかられけるを、くちをしく思ひこめて過ごしけるに、去ぬる住吉の戰に討たれて失せし宇野六郎といひしが子に熊王といひけるが、まだをさなきとき光範にいひけるは、「正儀は我がためにも親の敵にて候へば、いかにもしてうち侍らん。河内へこえて正儀に仕へはべらんに、をさなく候へば、などか心をゆるし申さぬことのあるべき。たとひ心をゆるすことのはべらずとも、七とせ八とせほども仕へ候はゞ、そのうちにはうちぬべきたよりのいかでなから

*正平七年。

ん。御暇をこそたまはらめ」と涙を流せば、光範もいとあはれに思ひながら、「幼ければ、敵の國へやらんも心もとなし。又は命にかはりて討たれし者の子なれば、かたみとも思ふべければ」と、強ひてとゞめ給ひけれども、「少し大人しくなりなば、よも近づけ給はじ。をさなくありなんとき參りてこそ」としきりに望みければ、力及び給はで、常に身をはなち給はざりし刀を賜ひて、「これにて本意とげよ」とて阿部野まで人あまた添へてやらせけるに、それよりは我にひとしき童一人を具して、赤阪の城に行きて、そのほとりに佇みてありけるを、兵庫介忠元が見つけて、「いかなる人にかおはすらんと尋ねられて」、「われは大夫判官光範の侍にて宇野六郎といい

ひける者の小子に熊王といへる者にてこそ候へ。父にて侍る六郎は去ぬる時住吉の戰に討たれて候を、一門にて侍る備後守が我を追ひうちて領地を奪ひ候へども、光範と力を合せ候へば、せん方なくて、いかなる寺へも入り侍りて僧法師にもなり、父の跡を弔ひ候はんがためにさすらへ侍り。」といひけるを、あはれときゝて、まづ我が方に伴ひてさまざまいたはりて、後に正儀にありつる事を語りて、「をさなくは候へど心のさかしくして。」など申すに、あはれがりたまひて召し寄せたまへり。

もとより情ある人なりければ、熊王も思ひつきて、親の仇をも忘れにけるにや、よく宮仕へにけり。十五ほどになりければ、「河内の國にて少しなるところをとらせん。」といひけれども、「いかで恥ある一矢をも射さぶらひてこそ。」とて辭しにけり。

あくる年の春、父が七めぐりにあたりけるに思ひつけて、「今宵正儀をうちて父の手向にもし、光範の心をも安め奉らん。」と思ひ立ちてありけるに、その日お前に召して、「けふ吉日にてあるなれば元服せよかし。」とて、和田和泉守に髻あげさせて、和田小次郎正寛と名のらせ、吉野殿よりたまはせたる鎧をたまひければ涙を袖にかけて喜ぶ。夜に入るまで正儀の御前にありけるが、またふと思ひ出でて、「討ち奉らんならば今宵こそ。」と思ひて、膝をおし直して正儀に目をかくれば、

年頃の情深かりしこと、今日の元服の事など思ひ續けて、「いかで情なくうち奉らん」と思ひかへして心を鎭むれば、「父の敵といひ、譜代の主君の仇といひ、一方ならねば」と思ひ定めけれども、何心もなくわたらせたまふありさまを見ければ、御いたはしくて堪へかねけるにや、廣緣に出で聲をあげて泣き叫ぶを、人々も正儀もおぼつかなく思ひたまうて、障子を開き見たまへるに、伏ししづめるさまのたゞには見えずありければ、「いかに」と問はせ給ひければ、ありつる心のうちを申して、「とにかくに、君のため、先君のため、父のために自ら死なんより外は候はず」とて刀を取り直せば、ありつる人どもみな涙にくれてありながら、「いかでさはあらん」ととりつきてはたらかせねば、力及ばで、その刀にて髻おしきり、往生院にて形をかへ、君よりたまはせたる名なればとて正寛法師とぞいひける。

*河内國南河内郡池島村。楠氏の石塔あり。

寺の傍に草の庵をむすびて、「若しも心のかはることのありもやせん」とて、往生院の門の外へは出でずして行ひてありけり。光範よりたまはせける刀は、ありしありさまをくはしく書きそへてかへしけりとかや。いとあはれなりける事にこそ。（吉野拾遺）

二〇　武士のなさけ

芳賀矢一

日本の武士は文武二道をかけて嗜みがあるのを最上の理

想とした。上代の荒魂・和魂の思想は、卽ちこれである。すべて物のあはれを知ることが本當の武士である。義理といひ、慈悲といふのがこの精神である。熊谷直實が、

取つておさへて首をかゝんとて、甲をおし仰いで見たりければ、薄化粧して鐵漿黑なり。我が子の小次郎が齡して十六七ばかんなるが、容貌まことに美麗なり。

を見て敦盛をゆるさうとしたのが其の本色である。これも出來難かつた爲に、無常を悟つて法然上人の弟子となつたことが、武士として如何にも優にやさしい事と感心するのである。吉野拾遺の楠木正行が辨內侍を亂暴人の手から奪ひ返した話、しかも其の女を賜はるといふ敕命があつ

*名は源空。淨土專念宗の始祖。

とき、「*とても世にながらふべくもあらぬ身の、」の歌でこれを辭したといふことは、その行爲、その文雅、武士の標本といふべきものである。

仇敵までもなつくといふのが眞の武士で、同じく吉野拾遺の熊王が、正儀を仇とねらつて、遂にその高義に感じて討たれなかつたといふ話は、安倍宗任が義家に降つて遂に感化されたといふ話と同一轍である。武士は敵をもなつけるといふなさけが無ければならぬ。武士は主君に對しての眞心と同時に、敵に對してのなさけを持たねばならぬ。楠木正行が瓜生野の戰に、敵の溺卒五百餘人を助けて、醫藥を給して勞はつた事がある。これは日本に於ける赤十字事

*とても世にながらふべくもあらぬ身の、かりの契をいかで結ばん。

業として著しいものである。はじめ日本が赤十字社に加入しようとした時は、外人は例の通り日本を野蠻視して居つたから、日本にも昔から赤十字の様な事業をやつた事があるかと問合せに來た。其の時、この例を以て答へたので、これがために赤十字社の加入が出來たといふ事である。

日清・北清・日露等の事件に、日本赤十字社の爲した事業は著明な事實であつて、今では西洋諸國でも日本の赤十字社の目ざましい活動を認めて居る。日本人には古くからこの考があつたのである。

今昔物語の「平維茂罰藤原師任語」に、

餘五將軍が、

屋共に火皆つけて、凡そ女をば上下手な懸けそ。男と云

(餘)鎮守府將軍平繁盛の孫にして貞盛の養子。

(平)維茂の通稱。

はん者をば、見えんに隨つて射臥せよ。

といつた話があるが、之を以ても、女子の様な抵抗力の無いものには全く武力を加へぬといふ武士のなさけが見える。

朝顏日記の駒澤は武士の標本であつて、岩代は似非武士の代表者である。

日本人は、上代には山の幸で兎や鹿の肉、いはゆる毛の荒物を食用にした事はあるけれども、家畜の肉を食つた事は無かつた。後世になつて、佛教の影響から全く肉食を禁じて以來は、尙更の事である。自分の家に飼つたものを殺して食ふことは、日本人の忍びぬ所である。今日でも、自分の家の鷄をしめ殺して心持よく食ふ人は至つて少ないと思ふ。

(駒)澤治郎左衞門。

(岩)代多喜太。

鰻屋の主人が目を病むとか、鳥屋の息子が鳥肌に生れたとかいふやうな話は、強ち佛敎からの迷信ではない、日本人の本性から來た話である。日本に牧畜業の發達せぬのもこれが爲である。此の仁慈心は理窟から言へば論にはならぬが、そこが人のなさけである。「君子遠庖廚。」といふ語もこの事である。「惻隱之心、仁之端也。」とも孟子はいつて居る。「窮鳥懷に入れば、獵夫もこれを殺さず。」といふのも支那の語ではあるが、事實は日本に弘く行はれて居る。

近頃は動物虐待防止會といふものが出來て、動物に慈悲を施すことを主唱して居る。これも西洋文明國からの風潮で、奴隸制度を廢したのも、つい近頃であるが、段々と其の德

(一) 君子之於禽獸也、見其生、不忍見其死、聞其聲、不忍食其肉、是以君子遠庖廚。
(二) 窮鳥入懷、仁人所憫。
(三) 一八六三年。

が禽獸にも及んで來たのである。西洋はいさ知らず、日本では昔から禽獸に對して毫も虐待をした例證はない。農夫が牛や馬をいたはる事は一通りでない。軍馬に徵發された馬に對して涙をのんで別れた話はいくらも聞いた。鹽原多助の實例は現在いくらもあるのである。

畠山は赤威の鎧に護田鳥毛の矢負ひ、三日月といふ栗毛の太く逞しきに乘つたりけり。此の馬鞭打に三日月程なる月影のありければ、名を得たり。壇の上にて馬より下りさしのぞいて申しけるは、「爰は大事の惡所、馬轉してはあしかるべし。『親にかゝる時、子にかゝる折。』といふ事あり。今日は馬を勞らん。」とて、手綱・腹帶より合せて七寸

に餘りて大きに太き馬を十文字に引きからげて、鎧の上に搔負ひて、椎の木のすたち一本ねぢ切り杖につき、岩の道をしづ〳〵とこそ下りけれ(中略)。皇山は「此の崖岩に馬損じては不便なり。日比は汝にかゝりさ。今日は汝をはぐくまん」といひける、情深しと覺えたり。

武士のなさけは馬にも及ぶのである。神前の馬はいふに及ばず、八幡の鳩、稻荷の狐、山王の猿、春日の鹿。天地自然に親しむ我が國民は禽獸を愛しこそすれ、決して虐待はせぬのである。(國民性十論)

二一　友に寄す

高山樗牛

伊豆國田方郡。
熱田町の南端。
相模國足柄下郡。

如何御暮しなされ候や。此方相變らず碌々罷在候間、餘事ながら御安心下されたく候。此の頃は事に紛れ御無沙汰に打過ぎ候。毎度御面倒の事のみ御賴み申上げ謝し奉り候。徒然の折には物ほしきまゝ、色々御註文申上候へども、實際手にとるは稀に御座候。水彩畫にても描きみんとて先頃繪具など取り寄せ候へども、是亦手に觸れず候。顧みれば、我ながら侘しくも暮しつるものかなと思はれ候へども、その日〳〵はなかなかに樂しく過し申候。

小生の室は熱海中にて最も眺望よき處にて、魚見崎より眞鶴崎まで一望の下にこれあり候。朝日影さし入

*獨逸の詩人 一七九九―一八五六。

る頃に起き出でて、九時頃より濱邊など散歩致し、午後は圍碁・大弓等に費し、又は一卷の*ハイネ集を携へて山腹の芝原に仰臥し、大海の浩蕩に對して朗吟することは、まことに塵外の樂みに御座候。或は日暮の空、ひとり磯邊の松に腰打懸けてやすらへば、夢ともなく現ともなき、あやしき思雲の如く涌き出で申候。げにや自然の無盡藏なる、今はた驚かるゝばかりに御座候。我も人も自然々々と口にこそは言へ、幾人か其の眞味を會得したるや。天の響、地の響、思ひ見るだに高く深く候へども、その感ずる人の心は如何ばかり高く深きものに候べき。やう〳〵夕日影も名殘無く暮れ果てゝ、

漁火ほの見ゆる頃に相成候へば、ざんざ〳〵の波音のみ高く相成り、水と空との別も消えて、天地も一つになりたらんと思はるゝころ、「夜は眠のために造られたるものにあらず」との詩人の言葉の今更に思ひ出でられ候。

去年の暮より二三日前までは月色殊の外めでたく、あかず夜をふかして打眺め申候。元日の夜は十七夜なりしゆゑ、月の海を出づる頃、小生の宿に笹川・姉崎・大橋・熊谷の諸氏と共に觀月の小宴を張り申候ひき。一昨四日の夜、九時頃にても候ひけん、牀に就かんとて、はからず窗の間より海邊をながめ候へば、缺月ながら一間

ばかり海と離れ、言ふばかりなくめでたき景色にて候ひしかば、下女に命じて雨戸をあけさせ、欄によりてハイネを朗吟いたし候。其の時の心地よさ、「あはれ、われこのまゝ石にも金にもなれかし」と思はれ候ひき。貴兄等はさぞかし日々御勉學の御事ならんと羨まれ申候。時には御書賜ひ候へかし。病氣も大方は宜しく候間、御心配下さるまじく候。申上げたき事山々これあり候へども、まづこれにて筆をとめ候。かしこ。

（樗牛全集）

二二　門生に諭す

室　鳩巣

諸君の如きは、春秋に富み、材力に足る。若し懈らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。然れども歳月は恃むに足らず、材力は多とするに足らず、たゞ孳々汲々として勉めて息まざるにありぬべし。もし悠々として日を渉り、一旦年老い齡傾きて後、日頃の懈を思ひ出でていかに悔ゆとも何の益かあるべき。即ち今、余が身の上にて候ふ。されば古詩にも、

少壯不努力、老大徒傷悲。

といひ、陶淵明も、

盛年不重來、一日難再晨。及時當勉勵、歳月不待人

といへば、古人も此の感懐を同じうすとぞ見ゆる。此等の

（一）文選。

（二）名は潛。晉人。

詩句、時々吟詠して勇進の氣を振ひ起すべし。又世に傳ふる朱(一)文公の勸學の文に、

勿謂今日不學而有來日。勿謂今年不學而有來年。
日月逝矣、歲不我延。嗚呼老矣、是誰之愆。

言簡にして意も明白なり。折節打誦じて自ら警むるによかるべし。

それよりも余が常に愛するは陶(二)侃が語なり。

大禹聖人、乃惜寸陰。至於衆人、當惜分陰。豈可佚遊荒廢、生無益於時、死無聞於後。是自棄也。

といへるこそ學者志を立つる法とすべきなれ。前にいへる淵明が詩も曩祖以來の家法にこそと思はる。凡そ人と

(一) 朱熹。宋人。
(二) 晉人。陶淵明の曾祖父。

生れて學に志ありといふきはの、生きて時に益なく死して後に聞ゆることなく、草木と同じく朽ち果てんはいと口惜しかるべきことなり。されば諸君もこの陶侃が語をもて自ら激昂して日夜勤勉せらるべし。

但し學は勇進を喜ぶといへども又急迫なるを嫌ふ。とかく一生こゝを離れぬことなれば急迫にして求むべきにあらず、たゞ懈を戒めて常に聖賢の書に優游涵泳しなば、久しうして自ら進益あるべし。余、昔加賀にありしとき、士族の中に紹鷗(一)・利休(二)が風流を慕ひて茶湯を好む者あり。江戸へ行役するとき、道中茶具を持して、逆旅にても釜をかけ炭をおきて樂みとしけるを、同行の人見て、「いかにすけばとて道

(一) 織田信長が茶道の師なり。
(二) 千宗易。豐太閤が茶道の師なり。

中にてはやめよかし」といへば、その人いふは、「道中とて一生の外にあらばこそ、これも一生の日數の内なればわが茶湯をする日にあらずといふことなし。家にあると何ぞ異ならん」とてその後もやめざりき。學者の道に志すも此の人の茶湯を好むが如くなるべし。（駿臺雜話）

二三　西航記

巖谷小波

余は此の度の渡航にわざと獨逸の郵船を選びぬ。そはただに船賃の廉きためのみならず、せめては船中になりとも語學の練習をなさばやと思へるなり。殊に余等の乘れるはハンブルヒ號とて、長さ五百五十呎、幅六十呎、噸數一萬の大船、さきには大西洋通ひなりしを、この頃東洋に廻りしものとぞ。さながら一大ホテルの海に浮びたらん樣なり。

ふくては玄海も黑潮も何の恐るゝものかはと、

秋高く、船大いに、海靜かなり。

吳淞は楊子江の流をうけて聞きしにまさる濁江なり。船は一夜を此の沖合にあかし、次の朝水先案内の來るを待ちて、初めて吳淞の江に入りぬ。さるに、風横さまに來りて、濁浪やゝもすれば甲板を汚さんとし、人は大方船室にこもりて何れも眉を顰めざるはなかりき。

上海及び香港にてしほらしきは草花賣、いかめしきは印度人の巡査、やかましきは芝居の囃子、うるさきは支那人の車

夫、美しきは店々の金看板、さて羨ましきは道路の修繕の行き屆ける、余等東京に住み馴れし者には殊にしか覺ゆるぞかし。

香港は上海に比して狹けれど、きたなからず。打見たるさま歐七清三の景色なり。されど、もとより水近く山迫りたれば、町の過半は阪路にて、その邊は例の轎を行るに、轎苦力の力强くて何程行くも決して息を入るゝことなし。

ピークはこの地の名所なれば、例の電車にて五分ばかりに上るに、全港の景色さながら活けるパノラマなり。をりから空晴れて港内鏡の如く、これにかゝれる船の數々、さしも余等が一萬噸もこゝからはほんのおもちや船なり。

晝は海岸の清風樓に、夜は山手の領事が館に、二度とも日本料理に舌鼓打ちて大いに腹の蟲を慰めたれど、憾むらくは遂に湯に入ることかなはず。秋とはいへど七八月頃の陽氣を一日歩きて汗に染みながら、そのまゝ船に歸る氣味のわるさ。

香港を出でてシンガポールに近く、恰も舊曆の十三夜に會へり。曩に國を出づる時、知十子余に餞するに、

後の月はジャガタラ芋や御船中。

の句を以てせられぬ。この夜舷頭に立ちてそゞろにその句の忍び出でられしかば、今はたそを鸚鵡返しに、

後の月ジャワ、スマトラも見えんとす。

※岡野知十。

これも月明の夜の事なりき、上海より乘りし下等船客の、今朝船中にみきかりしとてこれを水葬す。をりしも海上一面黃金をとかして、故らに死者が往生を迎ふるものゝ如し。

命二つあらば身投げん、月の海。

といへる去來*の句をおもふ。

松の月、竹の月、さて梅花の月などはとり〴〵歌に入りたるが、これはシンガポールの海邊なる椰子の梢にかゝれる月も又一入の眺ぞかし。

コロンボは思ひしよりもよき處なり。人と家とのきたなきにかはりて、自然の景の麗しきはシンガポールの及ぶ所にあらず。殊に池沼森林に富めるは一入景を助くと見ゆ。

*芭蕉の門人。向井氏。

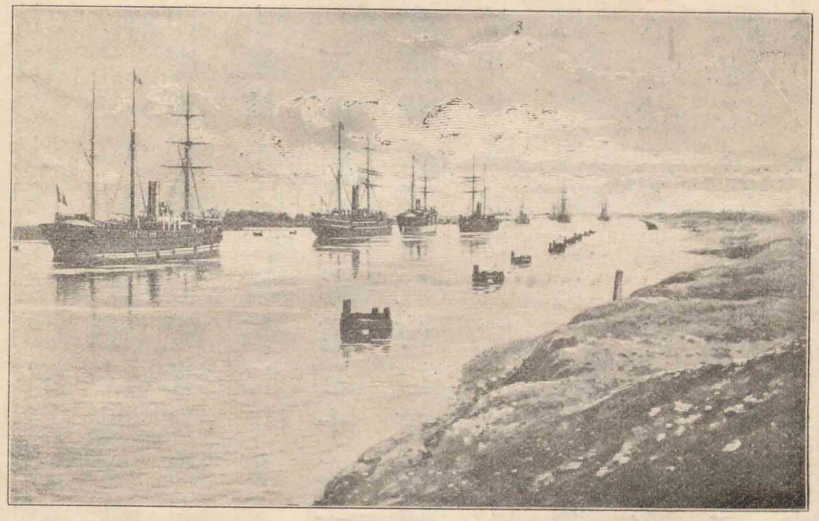
榕樹の枝根のをかしきを見て、

木によりて章魚を求めし茂りかな。

印度洋の名物は電光に海月か。天の川のやゝ淡うなれるも風情ありて、夜毎に甲板を逍遙すること多時。

天の川、こゝ赤道と十文字。

印度洋の酷暑、紅海の苦熱は日本にてさんざ驚かされたれば、用心をさ〴〵怠らざりしに、印度洋も涼しければ紅海も思ひしほどにあらず。殊にスエズ運河近くは朝風肌にひやつきて、感冒も引きかぬまじき有樣、日射病・マラリヤは殆ど思ひもよらざりき。スエズの運河はさすが世界の偉觀なり。秋の日豐かに沙漠のあなたに沈み行く。まことに



スエズ運河

沙漠の夕照は印度洋の旭日に對してこの航路の雙絶なるべし。

地中海に入りては時候とみに涼しく、まづは日本の晩秋とかはることなし。シチリヤの海峽を過ぎしは生憎まだ夜の明けぬ頃とて瀬戸内に似たる佳景は見得ざりしが、ナポリの港に入りし時は、夕榮の空茜を染めて、ベスビオの煙、名も知らぬ山の上の古城など、こゝにはじめて歐洲の風光に接したる眼のたゞ活畫圖に奪はるゝのみ。(洋行土産)

二四　俳句評釋

正岡子規

俳句の妙味は終に説明すべからず。されど、字句の解釋はさまで難きにあらず。今、初學のために二三の古句を解説し、併せて多少の批評をなすべし。

何事ぞ、花見る人の長刀。　去來

意は、長刀をさしたる人の、花見に出かけたるを咎めたるなり。花見とならば、いかめしき長刀をさして、羣集の中へ出づるにも及ぶまじきに、その無風流は何事ぞと嘲りたるな

り。此等は多少の理想を含みをる故に、俗間に傳はり稱せらるれども、名句といふは必ずしもこの種の句に限らざるなり。

蒲團著て寢さる姿や、東山。　嵐雪*

これは、實景を知らぬ人にはその味を解し難し。試に、京都に行きてつく〴〵と東山を見るべし。低き山の近くに在りて、しかも頂の少しづつ高低ある處、恰も人が蒲團を被りて寢たるに似たり。されば、こそこの譬喩的の吟ありたるなれ。品のよき句にはあらねど、滑稽と輕妙とを以て勝りたるものにて容易に摹倣し得べからず。さて、この句につきては多くの人の氣づかざる特色あり、そは冬の季といふことなり。さすがの都も冬枯れて、見るものとして淋しく寒からぬはなきが中に、彼の東山を見ればこれも春頃のなまめきたる樣を失ひて、唯ひつそりと寒さうに横たはる處、蒲團うち被りて寢たると見れば、淋しさの中に多少のをかしみもありて、何となく面白う感ぜらるゝなり。

我が雪とれもへば輕し、傘ぢ上。　其角*

普通には「我がものとおもへば輕し、傘の雪」として傳はれり。されど、「我がもの」としては甚だ俗なり、「我が雪」の方に從ふべし。意味は解釋するまでもなし。この句、斬新を以て賞すべし。若し之を摹倣する者あらば直ちに邪路に陷ることと必定なり。

*芭蕉の門人。服部氏。

*芭蕉の門人。榎本氏。

(一)芭蕉の門人。内藤氏。

(二)大島氏。

ゐが事と、泥鰌の逃げし根芹かな。　丈艸(一)

芹は春のはじめのものなり。芹摘にと手を出したれば、芹のあたりに居たる泥鰌の捕へられんとや恐れけん、あちらに逃げ隠れたりといふ意にて、泥鰌を擬人して輕くおどけたる處、丈艸の獨壇なり。

世の中は三日見ぬ間ふ櫻ろかな。　蓼太(二)

名高き句にて世の人、大方は知れり。誰にもわかる句にして、しかも理想を含みたれば世人には賞翫せらる。されど理想を含みたるもの必ずしも善くはあらず。この句、格調頗る下品なり。俗には「三日見ぬ間の」と傳へたれども、矢張「見ぬ間に」の方よろし。「の」とすれば、全く譬喩となりて味少とすれば、櫻が主となりて實景となる故に多少の趣を生ずべし。

菊の香や奈良には古き佛だち。　芭蕉

この句に於て、菊と佛とは場所の關係なし。必ずしも佛の前に菊を供へたるにもあらず、必ずしも佛堂の傍に菊の咲きたるにもあらず。強ひて場所の關係をいはゞ、菊も古佛も共に奈良にあるまでの事なり。作者の奈良に遊びし時、恰も菊の咲く頃なりしなるべく、從つてこの句を以て奈良を表したるなるべしと雖も、菊花と古佛との取合せは共にさび盡したる處、少しも動かぬやうに見ゆ。こゝ作者の活眼といふべし。

時鳥鳴くや、雲雀の十文字。　去來

時鳥は夏にして、雲雀は春なり。時鳥は春に鳴かざれども、雲雀は夏も居るゆゑ、この句は夏季となるなり。時鳥は横一文字に飛ぶものにして、雲雀は下より上へ眞直に上るものなり。故に丁度雲雀の上る處を時鳥が横ぎりて恰も十文字の如くなりたるをいへり。最も巧なる句なり。

（俳諧大要）

二五　平重盛論 その一

高山樗牛

小松の内府重盛はげに智仁勇兼備の大臣なりき。此の點より見れば彼は平家第一等の人物といふべかりき。唯理に明かなるに較ぶれば、その意は寧ろ弱く、その情は寧ろ脆かりき。彼がその材能を發揮して遺憾なからんが爲には、少なくとも更に數層の强烈なる意志を要したりき。加ふるに早く佛説に歸依して現世の無常を觀ぜしが爲に、奉公の大義に於て聊か闕くるところあるを免れず。此の人にして此の弊あり、洵に惜むべし。

四十三年の齡は重盛に於て決して短きものにあらざりき。平家の興るや彼實に其の樞軸たり。平家の榮ゆるや彼實にその柱石たり。彼の一生は其の父入道と共に平家史の大半を語るものなりき。清盛心剛に憍强く、眞に一世の豪傑なりしかど、其の事をなすに當りて重盛に待たざること

殆ど一度だにもあらざりき。戰陣に臨みては危きを矢石の間に救ひ、帷幄に參しては籌を百里の外に運らし、世靜まれば儀禮彼に於て備はり、道衰ふれば大義彼によりて正されき。彼は啻に平家一門の柱石たりしのみならず、又世道の名鑒たり、君國の宗師たりき。藤氏衰へてより世に人傑なし、而して重盛實に其の人傑の第一人なりき。

平重盛（京都高雄神護寺藏）

惡源太義平と紫宸殿の階下に鬬ひし重盛は如何に勇ましかりしよ。彼武藝に於て人後に落つるものにあらざりき。信賴、平家の不在を窺うて亂を起すや、熊野參詣の途上にありし清盛をはじめ平家の一族は寧ろ西國に走りて再擧を圖らんと欲したりき。かの時平家にして直ちに都に歸らざりせば天下の事ほゞ知るべきのみ。此の時に當りて衆論を排して入京を唱へ、大義名分を提唱して士氣を鼓舞したるは實に重盛なりき。されば平治の勝を論ずれば當に功一級たるべきもの實に重盛たり。唯この一勝あり、平家の勢はさながら蛟龍の雲に乘じたるが如きものありき。されば此の氣運を致したる重盛こそは正しく一門興隆の開山とも稱すべけれ。

*源義朝の長子。

(一)平治の亂。

(二)蛟龍得二雲雨一、終非二池中物一也。

世は既に平家の世となりて、四海の權柄入道が掌裏にあり。重盛が天分益、其の高きを加へぬ。今や彼一武人にあらずして朝廷の輔弼たり。公私内外の間に處して君國の大事を辨ずべきもの、實に彼を待つて初めて人ありき。其の男資盛、(一)關白の儀仗を冒して辱しめられし時、入道は大いに怒りて暴慢の復讎を試みしが、重盛は深く慚愧し、資盛を放つて世に謝しき。鹿が谷の事ありて成親の斬られんとせし時、一國の重臣、私門の成敗に任ずべからざるを說破せしも重盛なりき。事延いて法(二)皇幽閉の擧あらんとするや、四恩の妙理を引いて君臣の大義を訓へしもの亦重盛なりき。入道が我執の一念は幾度かこれがために沮まれて、君國の

(一) 藤原基房。
(二) 後白河法皇。

事ために僅に安らけきを得たり。かゝる間に忠孝の兩全を期し公私の事無きを謀れる重盛が心事の如何ばかり苦しかりしかは察するに餘りありといふべし。あはれ入道が榮華は壯大極りなかりしが、其の裏面には其の愛子を犧牲とせる慘憺たる悲劇ありき。重盛年なほ壯にして夙に厭世の心を動かし、早く佛說に歸依して來世を希求せしもの、其の際遇の自ら然らしめしところ。その情や深く憐むべしとせん。(平相國)

二六　平重盛論その二

高山樗牛

然れども此の佛說に歸依せる事は、重盛にとりては寧ろ恨

事なりきと謂はざるを得ず。彼、身は一國の大臣として奉公の大義を辨ずるもの、宜しく忠を勵み道を盡し、斃れて後已むべきなり。洵に忠孝兩全し難くして、骨肉の私情さすがに絶ち易からざれど、事體の大小、云爲の先後、必ずしも辨じ難からず。何ぞ妄りに一身の安慰を冥々の後にのみ求むべしとせん。此の難關に當りて能く功を擧ぐるもの眞に人傑といふべきなり。重盛たるもの輕々しく事局を回避して自ら全うすべからざりしなり。彼の熊野に禱る詞を見るに、要は一門の榮華永きを保たじ、寧ろ死して其の末路に遭遇せざらんと謂ふにあり。何ぞその願の私情に拘ることの多くして公義に盡すことの少なきや。彼の一身は公私内外の望の由つて繫るところ、君は以て泰きを得、父は以て正しきを得、洵に一門の柱石、一世の儀表たり。彼死せば入道が暴横はさながら悍馬の御に離れしが如けん。帝座の危きや知るべきなり。彼死せば一家の望立ちどころに世に離るべし。一旦事あらん日誰か能く擁護の任に當るべき。一門の危きや亦知るべきなり。重盛已に一身を以てこの大局を保持し、居然としてその重きに任ず、何ぞ區々の私情のために逃避すべけんや。重盛その希世の聰明を以てして如何ぞかばかりの理義を辨ぜざらん。辨じて而してなほ之を敢てせざるものは其の佛説に歸依したるの致すところと謂はざるべからず。是、重盛にとりて一

大恨事に非ずして何ぞ。

世の忠孝の龜鑒として重盛を論ずるものは吾人の同意する能はざるところなり。其の情や誠に憐むべし、其の行や則ち大いに未だし。殊に平家盛衰の側より見れば、自ら求めて其の身を殺したるは、則ち自ら求めて其の家を亡したるに等し。入道心剛なりと雖も齢すでに耳順を越ゆ。其の身後に於て誰か一門統率の任に當るべき。凡庸宗盛の輩の素より爲すなきこと重盛の明を待つて知らざるなり。加ふるに諸國の源氏外に機を窺ふあり、院宣一たび下らば天下の事俄に知り難し。重盛此の危機に際して何ぞ自ら重んぜざりしか。文覺の賴朝に說ける言に曰く、「平家には小松の大臣殿こそ心も剛に謀も勝れておはせしか。平家の運命茲に極れるか、去年の八月薨去せられぬ。今は何の憚るところぞ。御邊一たび起つて麾かば天下靡然として從はん」と。平家の存亡一に重盛の上に懸りしこと亦以て想ふべきにあらずや。あはれ世は如何にもなりなん、唯力を盡し忠を勵みてもなほ及ばざらん時、かねて亡き身のせん術なからめや。さるを君父を捨て、門下を去り、偏に一身の安慰を未來に祈願せるこそ心得ね。吾人こゝに至りて遂に重盛を辯護する辭を知らざるなり。(平相國)

*俗稱は遠藤盛遠。

二七　經筵進講錄

元田永孚

臣謹んで講ず。孔門の諸子、みな德行を務む。顏子は純粹、其の資高し、聖人を違ること遠からず。其の次は閔子騫・仲弓。然れども、能く孔子の道を受け傳へたるは、有子・曾子にして、就中曾子は篤學力行、その工夫最も切實なりとす。「吾日三省吾身。爲人謀而不忠乎。與朋友交而不信乎。傳而不習乎」といふものは、其の毎日、猛省痛治するところの實行なり。蓋し曾子は魯鈍の質なるにもかゝはらず、其の聖人に親炙して教を受くるや、遂に其の道を傳へて、亞聖の次に列することを得たり。而して其の自修の要は忠信と傳習とに過ぎず。何ぞ其の簡約にして近切なるや。

夫、忠信の二字は千古の確言にして、三尺の童子も之を口誦することを知る。而して其の意義に於ては之を體認するもの、蓋し少なし。臣請ふ之を述べん。忠信、之を約言すれば誠と訓ず。之を析言すれば、忠は自ら忠、信は自ら信にして意義各別なり。又忠信は、誠に至る所以にして、誠は忠信の至なり。故に、朱註に「盡己之謂忠、以實之謂信」。是、伊川程頤の說にして、忠信の義を說く、最も適切なりとす。明道程顥は「發己自盡爲忠、循物無違謂信」と說きて、其の忠信に著手する次第較〻明細なりとす。

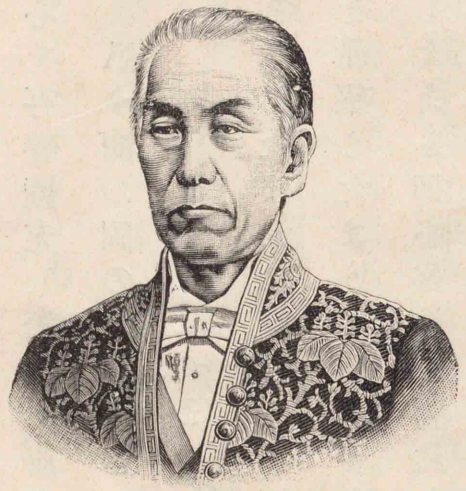
臣反復之を思ひ、謂へらく、「忠は己が有らん限りを盡して漏さず、義に適當するをいふなり。信は心のありのまゝを言に出して、隱すことなく、道に違はざるをいふなり。忠と信

(一六二)中庸の語。

と相合うて、心の主となり、乃ち誠となる。『誠者天之道也』自然にして誠なるなり。『思誠者人之道也』之を思ふは人の所爲にして忠信をいふなり。誠と信と、其の間あるは、天然と人爲とによればなり。其の至るに及んでは一なり。本邦にて『惟神の道』と云ふは、乃ち天道の誠をいふ。『隨神之道』と云ふは、乃ち人道の忠信をいふ。苟も惟神、天道の誠に至らんと欲せば、人道の忠信より從事せざるべからず。曾子忠信の說、其の要を得たりといふべしと。

今、曾子の三省する所を以て、諸を己に體し、人君となりては、「吾が民の爲に慈養生息、其の所を得んことを慮るや、或は忠ならざるか、天下に施す所の敕諭・命令、或は政事・法律の表裏

支吾ありて、或は信を失はんか、先王の成憲、前哲の遺訓を傳誦して或は習熟せざるか。」と省み給ふ。人臣となりても、亦各省る所あり。斯の如く、君臣相共に日々躬親ら省察力行せば、則ち何ぞ國家生民の治安ならざる事あらんや、何ぞ聖帝・賢臣たらざるを患へんや。臣素より陛下の省察力行、祖宗の聖帝明王に愧ぢ給はずして、曾子の自修に明察する所あるを信ず。嘗て後宮に侍して之を聞けり。



元田永孚

いにしへの文見るさびに思ふかな、

れのが治むる國は如何ふと。

聖躬の深く躬ら省みたまふことかくの如し。苟も此の聖心を存養擴充し給はゞ、唐虞三代も之に超ゆることなし。

臥す龍の岡のあら雪ふみわけて
草のいほりを訪ふ人やたれ。

と詠じたまふに至つては、劉備の孔明を求めし心の切なるを希望したまうて、聖躬、賢を求むる誠を以て親ら劉備に比したまふ御心言外に藹然たり。又周姜后、宣王を諫むる題を賜ひしに、皇后陛下の詠進したまひしは、

身をけがして飾りし花を散らさずば、
朝日のかげも匂はざらまし。

又正心の御題に、

かへりみて心は問はゞ見ゆべけを、
さゞしき道にかに惑ふらん。

兩陛下關々和樂の中に相戒め、相懋めたまふ聖心、歌詠の表に溢れて、省察力行の實、天地も感動すべし。之を拜誦する者、誰か感泣奮勵して、亦自ら猛省せざらんや。臣此の章を講ずるに於て、たま〳〵感ずる所あり。故に叨に德旨を摘發すること此の如し。庶幾くは宏度之を聽納したまひて更にます〳〵力勉あらせられんことを。（經筵進講錄）

中學
國文教科書 卷六終

文部省檢定濟
明治四十四年二月二日 中學校國語科教科書

明治四十四年十一月十八日 修正再版發行
明治四十四年十一月廿五日 修正再版印刷
明治四十四年十一月廿八日 修正再版發行
明治四十三年十一月十日 訂正再版印刷
明治四十三年十一月十九日 修正再版發行

編者 東京市小石川區高田老松町五十二番地 吉田彌平
發行者 東京市神田區裏神保町六番地 上原才一
發行所 東京市神田區裏神保町六番地 光風館書店 (電話本局二千三十九番 振替口座東京三二七番)
關西專賣 大阪市東區備後町四丁目七十八番地 吉岡寶文館
印刷者 東京市神田區裏神保町六番地 矢島一三

定價各金貳拾五錢

著作權所有

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候に付萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直ちに御送附可致候

東京秀英舍第一工場印刷